



PUBLICATION:

CGWORLD

COUNTRY:

JAPAN

DATE:

DECEMER 2002

DESCRIPTION:

GENERAL ARTICLE ABOUT
THE LIGHT SURGEONS

キーワードは

s o u l

既存のVJとは一線を画したい、物語のある世界

日本の伝統文化に
強い関心を持ったクリスが、
日本のお土産に買ったのは、
「紙芝居」だった。これが日本の
伝統的な映像パフォーマンス
だということを
彼は知っていたのだろうか



クリス・アレン

ヒップホップを映像化する試みからはじまった
という彼の映像パフォーマンスを通して、映像と観客との、
一歩先をいくコミュニケーションの形態や
その可能性を探ってみる。

文・取材: 倉地紀子

きっかけは ヒップホップ

クラブでの映像パフォーマンスという、DJが作り出す音との相乗効果に重点を置いた、抽象的でアンビエント効果の高い映像が一般的とされてきた。ところがクリス・アレンの作品は、ヒップホップを背景に、彼が訪れた世界各国の都市の表情がドキュメンタリータッチで描き出されている。またそこでは、現実の都市の表情そのものを追うのではなく、その都市の景観やそこで暮らす人々の日常生活、起きた事件や社会現象などを、独自の視点から切り取り、自由な時間軸に沿って再構成して、現実にはないユニークな世界観を作り出している。

こういった形態のパフォーマンスを生み出すきっかけとなったのは、ヒップホップのDJをしていた弟が作り出す音に魅せられ、なんとかこれを映像化できないものかと考えるようになったことだったという。社会に対するメッセージやレジスタンスを謳いあげたヒップホップは、クリスを創作活動に駆り立てるものと非常に似通った部分を持っていたようで、彼は自ら撮影した現実社会のさまざまな表情を、自分の視点からダイナミックにスタイライズすることによって、ヒップホップが観客に呼びかけているものを映像化しようと考えたようだ。そして、そのスタイライズの手段として思いがけないほど有益だったのが、デジタル技術を用いた映像表現だったという。

もともと機械類にはなじみやすい体質だったようで、実写画像を切り取り、加工し、再構成して最終的にプロジェクタに通すまでの工程をリ

アルタイムに行なえるように、部分的にはデバイスそのものにまで手を加えて、独自のバイブレーションとして完成させた。このバイブレーションは、パフォーマンスのための技術的な「しかけ」であると同時に、作家にとつてのペン、シンガーにとつての声、アーティストの絵筆と同じ意味を持つている。実際のところクリスは、イラストやストーリーボードの代わりにこのバイブレーションを使ってアイデアや構成を練る。そして、やはりこのバイブレーションを使って自分の「視点」を定め、それらを具体的な映像にして、観客とのリアルタイムなコミュニケーションを図っている。もっとも、彼はその一方で、「デジタルなものには、soul（魂）がないと思う。そして、それらは、本来シンプルであるべき表現を、必要以上に複雑な表現に走らせる危険性を持っている。逆に伝統的なものには魂があるし、表現もシンプルだ」ともいつている。

大切なのは触れ合い。 相互影響が作品に

観客とのコミュニケーションは、クリスが作り出す映像表現において、もつとも重要な位置付けにあるともいえ、彼はそれに関して次のように語っている。「自分の作品を通して、人々に、彼らがこれまで気にも止めなかったことや意識していなかったことに気づかせ、彼らの魂に新しい感情を引き起こすことができればいいと思っている。それによって、自分が観客に与えたものと、それに対する反応として観客から返ってくるものとが融合し、さらに意外性のある新しい作品として仕上げていくはずだ」

映画のように完成された映像によって観客を魅惑するのではなく、双方向のコミュニケーションによって観客を満足させる映像をフレキシブルに作り出していく彼のパフォーマンスは、より民主的な表現形態ともいえる。もっとも、双方向のコミュニケーションとしてはインターネットがあるが、彼はこれを否定する。「実際に観客と触れることができない」からだという。また、「英国の伝統文化である演劇やコメディなどにみられる独特のユーモアも、自分の作品にとつて不可欠な要素だ」と語っている。シンプルな表現と、ソウルフルなコミュニケーションによって、マジカルな体験を生むことが彼の映像表現の理想だという。

クリス本人はあまり意識していないようだが、メッセージやプロパガンダを含んだ彼の映像には必然的にストーリーがある。そのためか、最近では、CMやミュージックビデオを中心としたコマーシャルな作品制作の依頼が、英国内だけでなくアメリカなどからも増えているという。ビジネス的な見地からはこのような動きに意欲的に取り組んでいるものの、作品制作においては彼が目指しているような観客とのコミュニケーションが非常に難しく、時としてそれが彼を当惑させてもいるようだ。

しかしながら、将来的な展望としては、映画制作に取り組みたいといっている。映画そのものの形態が、今あるものから必ず変わっていく、新しい形態の映画では、自分が目指す観客とのコミュニケーションが可能だと彼の嗅覚は感じとっているようだ。場合によっては、彼自身がその新しい形態を生む流れに加わっていくことになるのかもしれない。

都市の景観



さまざまな都市で自ら撮影した写真は、パフォーマンスで使用する映像の素材となっているだけでなく、イラストやストーリーボードの代わりとしての役割も果たしている

Material

映像

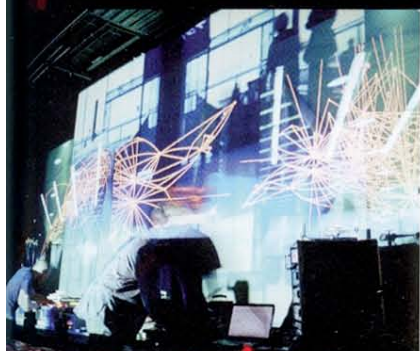
『The Light Surgeons』はライブパフォーマンスのタイトルでありクリスが10年前に設立した会社の名前でもある。最近では、CMやDVDの制作など多角的な映像制作をインターナショナルに展開している



The Light Surgeons



創作の根底、
人の持つ
コンセプト
に迫る!



paradigm
shifter